

■ 国語学習は“読み”が基本

私どもの子供の頃には“国語”といふ学科名は使はれないで“読み方”といふ名前が使はれてゐました。それで、国語の教科書も、“読本”と呼ばれてゐました。“読み方”の時間は毎日ありましたが、その外に、週に1、2時間の“書き方”“綴り方”といふ名前の時間がありました。

これが敗戦に^より、一括されて“国語”と改められ、その内容はアメリカに^ならって“聴く”“話す”“読む”“書く”の4領域に分けられ、特に“聴く”“話す”教育が重視されるやうに変わりました。

アメリカは多民族から成立ってゐる国ですから、英語の話せない児童生徒がかなりゐます。ところが、英語を聴き、話す能力が十分に無いと、学習を進めて行くことが出来ません。それで、アメリカでは“聴く”“話す”学習に特に力を入れてゐるわけです。これは当然の事です。

然し、日本は事情が全く違ひます。先生の話す言葉が理解できない子供などゐません。だから、“聴く”“話す”学習を重視する意味が無いのです。それに、“聴く”力も“話す”力も、基本的には“読む”学習に依って養はれるものです。読む学習で読解力をつけ語彙^{ごいりよく}を増すことが、そのまま聴く力になり、話す力を育てることになるのです。だから、戦前の読み方中心の学習が正しかったのです。

読解力や語彙力は、算数・理科・社会科等総ての教科学習の基礎能力でもあります。だから、欧米の殆どが、1・2・3年生においては、全学習の時間数の半分、もしくはそれ以上の時間を国語科の学習に充ててゐます。戦前の日本はやはりさうでした。

語彙力や読解力が不十分なうちから理科や社会科などの学習をしても、効率が悪いのは当然です。だから、いづれの国においても、低学年の間に語彙力や読解力を出来るだけ高めるやう、全学習の半分、もしくはそれ以上の時間を国語科の学習に充ててゐるのです。

戦前の日本では、理科は四年生から、社会科は5年生から始めてゐました。ヨーロッパの諸国やアメリカの大半は、今でもやはりさうです。それで私は、かな書きされてゐる理科や社会科の用語を漢字表記に改めて、理科や社会科の学習の中で、語彙力、^ひ延いては読解力を高める為の工夫と努力をしました。

かな表記では解り難い用語でも、これを漢字表記に改めると解り易くなりますので、理科や社会科の学習においても、その用語を漢字表記に改めるだけの事で、学習の効率が大幅好くなりました。理科とか社会科とかと言っても、その学習の基本は教科書の読解にあるのですから、それは当然の事だと思ひます。